

教育再生実行会議
第11回議事録

内閣官房教育再生実行会議担当室

第11回教育再生実行会議 議事次第

日 時：平成25年8月23日（金）15:00～16:30
場 所：総理官邸4階大会議室

1. 開 会
2. 高大接続・大学入試の在り方に関する討議
3. 閉 会

○鎌田座長 定刻となりましたので、ただいまより第11回「教育再生実行会議」を開催いたします。

委員の皆様方におかれましては、御多忙のところを御出席賜りまして、まことにありがとうございます。

本日は、前回までに引き続き、高大接続・大学入試の在り方について御議論いただきます。特に本日は、その前提となる高校教育、大学教育の在り方について御議論いただきます。

最初に、安倍総理より一言御挨拶をいただきます。総理、よろしくお願ひいたします。

○安倍内閣総理大臣 「教育再生実行会議」においては、6月以来、大学入試をはじめ、高校と大学の接続の在り方について、諸外国の実情なども伺いながら、議論を深めてまいりました。その上で、7月から8月にかけて、委員の皆様が大学などの視察を精力的に行っていたいただきました。改めて感謝申し上げたいと思います。

今後、高校と大学の接続の在り方について、更に議論を進めていただきたいと思います。その際、大学入試の「仕組み」に焦点が当たりがちではありますが、そもそも、大学入試は、高校教育と大学教育を橋渡しするものであり、大学入試を含めた教育プロセス全体としてよりよいものにしていく視点が不可欠だと考えます。

このため、大学入試のあるべき姿を議論していくためにも、「高校や大学の教育はどうあるべきか」という基本論を深めていただきたいと思います、そのことが極めて重要であると思います。

こうした観点から、本日は、高校教育、大学教育の在り方について御議論をいただきます。

委員の皆様におかれては、これからの教育の大きな方向性について、どうか率直な、そして闊達な御発言をいただきたいと思いますので、よろしくお願ひ申し上げます。

(報道関係者退室)

○鎌田座長 それでは、議事に入りたいと思います。

これまでヒアリングや視察を行い、高大接続・大学入試の在り方の議論を行ってまいりましたが、本日から、第四次提言に向けてさらに検討を深めていきたいと思ひます。

このテーマにつきましては、これまでの議論にもありましたとおり、また、先ほど安倍総理からも御指摘がありましたように、高校教育の在り方、大学教育の在り方を考え、その上で高大接続・大学入学者選抜の在り方を検討することが必要であります。

そこで、本日は、前提となる高校教育、大学教育の在り方について検討することとし、次回は大学入学者選抜について検討すると思ひます。

これまでいただいた御意見を踏まえつつ、検討に当たっての論点を私と事務局とで整理させていただき、資料1としてお配りいたしました。ごく簡単に説明をさせていただきます。

資料1の1ページ目には、「高校教育・大学教育にかかる論点」と、「高大接続・大学入学者選抜にかかる論点」の双方にわたる論点の目次にあたるものを掲げさせていただいております。

2ページ目、3ページ目は、「1 高校教育・大学教育にかかる論点」のみを記載させていただいております。「2 高大接続・大学入学者選抜にかかる論点」は、次回に向けて、また改めてお配りさせていただければと思っております。

「高校教育・大学教育にかかる論点」は、大きく3つの部分に分かれておりまして、論点1が「今後どのような人材を育成することが求められるか。そのための高校教育、大学教育の在り方はどうあるべきか」という、総論的な論点でございます。

その下に、第1番目に、前提となる世界におけるグローバル化の急速な進展と、我が国における少子化、高齢化の進展といった前提条件を記載させていただき、2番目には、高校教育の基本的な考え方。3番目で大学教育の基本的考え方。4番目に、第三次提言でも取り上げましたグローバル人材、イノベーション創出人材、そして地域社会の発展を担う人材の育成に向けた具体的な課題というものを掲げさせていただきました。

論点2は「あるべき高校教育を実現するため、何をなすべきか」ということで、内容的には、大きく2つに分かれております。

前段が「社会の一員として必要な能力の確実な習得と生徒の多様性を踏まえた特色化」を目指すということであり、後半が3ページ目の第2段落に当たりますけれども、「高校教育の質の確保」という課題を掲げさせていただきました。

論点の3番目には「あるべき大学教育を実現するため、何をすべきか」ということで、差し当たり6つの課題を列挙させていただいたところでありまして、それぞれ高校、大学を通じまして、教育の内容をより高度化し、質の保障をしていくこと等々を記載させていただいているところでございます。

事前に配付もさせていただいたところでございますので、時間の節約上、ごく概括的な説明でございますけれども、資料1の説明は以上とさせていただきます。

なお、資料3に記載いたしましたように、前回の会議以降、私も含め、委員皆様方で実際に大学等の現場を視察し、関係者の方々と大変密度の高い意見交換を行いました。これも踏まえながら御議論をいただければと思います。

なお、本日、総理は公務のため15時45分ごろまでの御出席となりますので、その点、よろしく願いをいたします。

それでは、まず、高校教育の在り方について、御意見をいただきたいと思っております。御意見のある方は挙手をお願いいたします。

それでは、川合委員、お願いします。

○川合委員 ありがとうございます。高校教育、大学教育を通じてどんな人材を育成することが重要かに関して提出資料のほうに書かせていただいております。

一番大事なのは、解決すべき社会課題を自ら提案し解決法を考え、そして社会に貢献す

る人材の育成だろろうと思っております。グローバルに活躍する人材としては、世界を知り、かつ日本を知るといのが大事です。平均寿命が90歳に近いような国でございますので、生涯にわたって基礎となる一般的な教養を高大で獲得したうえで、そして、シニアになってからも学び直す機会が与えられるようにし、高大で獲得した基礎的な学力をもとに専門性の異なる分野にも活用できることが高校、大学の教育を設定する上で非常に大事なポイントになると思っております。

高校も大学も両方に共通する重要なことがございます。それは学校での教育と同時に、社会の中での生き方を学ぶ機会をつくること、そのためには、365日、全てを学校の中で過ごすのではなく、自由度ある活動ができるような時間配分をすることが大事だと思っております。

高校教育に関して言いますと、そういった観点から、極端に専門に特化しないで、幅広い内容を学習して豊かな教養を習得することを基本とすべきだと考えております。当然、理科教育の特化など、一部の専門教育の強化を併用することは大いに推奨されるべきだと思いますが、それによって広い教養を身につけるとい本来の目的をおろそかにしないように設定が必要であります。

15歳で将来の方向を限定してしまう教育では人生の選択を限定することになりますので、なるべく広い可能性を残すことが必要だと思っております。

高校教育が全ての学生に3年間必要かどうかというのは前回は議論があったところだと思っております。早期に次の学習の習得、進んだステージに進むことが可能な学生については、足踏みをさせるのではなく、正式に高校卒業認定をした上で、上位校への進学が可能ができるようなシステムであってほしいと思っております。

今、大学の教員から見て、高校生の受けている授業は少し専門化し過ぎておまして、例えば理系の科目に関していえば、大学で生物や医科学を学ぶ上でも、物理や数学の知識が欠かせないのだということや、情報化社会では文系の学生もやはり数理学のような知識が必須であるということを実は高校現場の先生たちが意識されていなかったりするので、文系理系にとらわれない学習の重要性を認識いただく必要があると思っております。

そういうわけで、最新かつ最先端の情報を大学からも提供して、高校生の将来にとって何を学習する事が必要か、適切な情報共有をすることが望まれると思っております。

高等学校については以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

山内委員、どうぞ。

○山内委員 2点だけ申し上げます。

まず、1つは、高校において基礎的な能力、そうした学力ということは言うまでもないが、同時に、そうした知識というものがある種の成人になっていく、そして成人として社会を担っていく。社会人となるための助走期間でもあるということだと思います。そういう高校において、きちんとした規範意識は知の向上とともに社会的ルールを守る意味と責

任を理解させることを、そして規範意識についてもあわせて○の最初のところで入れていただけたらどうかと思います。

2つ目は、目標や志について主体的に考察するのはまことに大事なことでありますが、ここをわかりやすく入れてもらうために、受け入れてもらうために、最初に夢を持つ大事さについて説く。そして、夢を持つというのは、具体的に理想として実現していく具体的な決意や気構えというものが必要になります。そうしたプロセスを通して、自分の理想を志として高くしていく、実現していくという、夢と志というものを子供たちに^{ついで}対として教えていただきたいと思います。この2点だけを触れさせていただきました。

○鎌田座長 ありがとうございます。

加戸委員、その後、武田委員、お願いします。それから、鈴木委員、佃副座長。

○加戸委員 高校教育に関してはいろいろあるのでしょうかけれども、どうしても、よく学び、よく学びになってしまいがちだと思います。基本は、よく学び、よく遊べであって、これは自慢になるのですが、愛媛県で全国に呼びかけて俳句甲子園というのをやっています。愛媛は正岡子規の発祥の地でもあり、高校から5人の代表選手が俳句を出してディスカッションしてチャンピオンを決めていくのですけれども、一つの試みではありますが、こういう形で高等学校の中で、言うなればカリキュラム以外のもので、その人たちが芸術、文化、スポーツ、何でもいいのだけれども、自分で身に付けることによって、あるいは定年退職後、趣味がなくて困っていると聞きますけれども、何かを生きがいに、心に潤いを持って生きるようなもの、そういった素地づくりをするのが高校段階ではないのか。

だから、学業も大切だが、遊ぶことも大切で、遊びというのは芸術、文化、スポーツ、ここに書いていますけれども、主体的な活動に少なくとも1つは取り組みを指導するというのは、提言のときにはゴシックで強調するぐらいのことがあっていいのではないかと私は思っております。

あわせて、大切なことですが、今の社会保障の問題等々を議論していて大きな課題になっていますけれども、今、日本国を支えるのは、これからはボランティアだと思います。そういう意味では、高校段階からボランティア活動を義務づける、あるいはそれに準ずるような形で学校としての取り組みをもっともっと奨励すべきだと思っております。

実は、私も愛媛県知事時代に県民へのボランティア活動を呼びかけました。そして、地域によって参加率が高いところと低いところとあります。高いところは何かというところ、その地域の高等学校の生徒が参加してくれると参加率が一遍に上がるのです。ですから、範を示す形で高校生がボランティア活動の先頭に立てば、腰の重い地域住民もついてくるのではないかと思います。

以上です。

○鎌田座長 どうぞ。

○武田委員 まず、論点メモに関して個人的に大変共感する部分が多くて、ここからさらに肉づけされ、発展されることを本当に望みます。

私の場合、やはりスポーツを通じての経験に基づくお話になるのですけれども、私自身、高校生のときに日本代表に入りました。その中で、年上の先輩方と同じことを求められるので、高校生だからという理由で許されるというわけではなく、日本人が世界で戦っていくときにどんなことで勝負できるのかとか、自分の強みをすごく自覚をしなければならなかったり、そして、年上の中でもまれると、会話の中でも知識の豊かさが理解力の深さにもつながっていくので、コーチからスピード感も求められていくのです。わからないままでは練習が自分自身、足を引っ張ってしまうということになりましたので、理解したものを瞬時にどう使うか、高校生のときから必要だということをすごく強く自覚をしました。

それができていないという悔しいという思いで能動的に、それを克服したいと思って行動できるようになっていったので、高校のときから、〇の3つ目や5つ目にも書かれています。本当に海外に出ること、そして課外活動を積極的にすることで、学業だけではなくなかなか感じにくい部分をすごく認識する機会になると思うので、ぜひこれをもっと徹底的に高校の教育の中でも重要視していかれることを期待しております。

さらに、メンタルや世界で勝負するという視野、そして日本人が実はすごく能力があるのだということを教えてくれた存在というのが指導者だったので、大人だったり学校の先生だったり、そういう大人が責任感を自覚しなければならないなということを感じています。

今回、高校野球などを見ても、進学校の活躍が大変目立ちます。スポーツだけやっていたらいいというわけではなくて、勉学もちゃんとしっかりと取り組んでいるにもかかわらず、スポーツの世界でも結果を残すことができるというところにはすごく期待を見出していて、そういうことを教えられる先生は多いはずなので、それを学校全体のカリキュラムでどのように、スポーツだけを強くするというわけではなくて、そのメンタルを学校教育現場にどのように反映していくかということもそれぞれお話が進められるといいのかなと思いました。

以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

それでは、鈴木委員、次に佃副座長の順でお願いいたします。

○鈴木委員 プリント、ペーパーのほうで出しておりますので、要点はそこでごらんいただければよろしいかと思います。

その前に、先生方の机の上に配付させていただきましたのは、今年度のグローバル人材育成にチャレンジしている大学、42校がどのような取り組みを行っているかという資料です。ある受験産業がつくったもので、今後の理解への参考にお使いいただければと思います。

あと、国公立と私立のいわゆる偏差値による位置取りのランク表も配付しました。これを出しますと偏差値偏重の批判も起こるかと思いますが、私たち自身が、大学の状況と位置づけを一応理解しておく必要があります。この資料を目標にして多くの高校生がこの夏からいよいよ本格的な受験勉強に取り組んでいくわけです。その辺も理解しておいていただ

きたいということで、老婆心から配付させていただきました。

さて、私は高等学校に長年勤務してきました。10代の後半は非常に多感な時期で、1つの刺激で物凄い力を発揮しますし、将来の人生設計を作っていくスタートラインに立って自分の夢に挑戦する時期です。できるだけさまざまな形で、意欲的な若者が挑戦的な体験に取り組める機会をつくっていくことが、教育再生の上では非常に重要だと感じます。

第2点の論点に絡めますけれども、学校において生徒に一番影響力を与えられるのは教員なわけです。ところが、近年の教員の意識とかモチベーションが非常に低下しているものですから、なかなか生徒に影響力を与えられないし、力強く接することができないのです。野球の監督が選手に指示するような指導が現実にはなかなかやれないわけです。ですから、教員をもう少し再教育しまして、熱意を持って生徒の指導に当たれる、生徒にとっての学校を魅力化するために教員はどうあるべきか、その様な観点から教員に対する議論を深めていく必要があるかなと思います。

一方で、今、一説にひきこもり人口は160万人とも言われています。ひきこもりの増加は非常に大きな社会問題にもなっており、学校が悪いからとか、家庭の在り方が悪いからこうなったのだと言われていています。原因については病理学的な観点からも研究が進んでいるようです。しかし、不登校や引きこもりの児童生徒に対する対応を学校教育の現場では避けて通れません。どう対応するかということは少子化進行のもとで非常に大きな問題になっていますので、この件についても対応していく必要があると考えます。

これまで、グローバル人材の育成についていろいろ視察しながら考えてきました。非常に重要な課題で、多様な試みがなされているわけで感銘を受けました。一方で、私はこの夏、陸前高田市の山間部でボランティア的に農作業をしてきたのですが、驚いたのは、水田の耕作者がいなくなって櫛の歯が欠けるようにと表現したらよいのでしょうか、耕作地が荒廃してしまっている。本来、受け継ぐべき若者の姿が集落の中に見えないことに改めて驚いたのです。

おじいちゃんが1人死ぬと、そのまま田んぼが放棄されて、そこを受け継いで耕し、地域を再生していくような力が生まれていない。あのような津波被害を受けた土地でもそこに若者がいません。若者が責任と意欲を持って取り組まなければ地域再建はできないわけですので、グローバル化の一方では、地域によって立つのだという若者を、十分そこで生きていけるような力を育てていく必要があるということを改めて感じました。

海外体験を早い時期に経験することはとても大切だと思います。たまたま今日ここにはおりませんが、今年、熊本県で「海外チャレンジ塾」というような取り組みをやっております。海外に派遣する生徒達と向き合って、蒲島知事が英語で話したのです。そのうち知事は気持ちに乗ってきまして、約1時間、英語で話し続けたのです。生徒達は驚きながらも、話を聞きながら物凄く感動していたそうです。私たちの知事はこんな話せるのだ、国際教育に強い熱意を持っているのだ、その感動が生徒を変えます。この様な動機づけが必要なわけです。そういうような地方自治体における取り組みに対して、国が強くバックア

ップすれば、生徒の意識も変わり、瞳も強く輝いてくる筈だと考えました。

あと、高等学校教育を担って来て非常に申しわけないと思うのは、多くの高等学校が魅力を失ってしまっている。甲子園などを抜きにすれば、言い過ぎになるかもしれませんが、後は仮死状態の教育が展開されるわけです。少子化で統廃合になる学校もいっぱい出てきていますけれども、高等学校にもっと役割を課して、高校には地域住民の学習の場としての役割を果たさせるべきだと思います。小中学校がそれだろう、という人もいますけれども、専門性の高い利点や研究者も高校教員には多いので、地元住民の学習の場であり、地域の文化を育て受け継いでいく場なのだ、という使命を高校に担わせるべきだと私は思うのです。何等かのやりがいのある役割を課せば高校の先生方のモチベーションをより上げることが出来ます。現場の教員に対する温かい対応も必要だという観点から、どうすべきかを考えているところです。

以上です。

○佃副座長 私はここに書いてある論点については基本的に全く賛成なのですが、少しめり張りをつける意味で申し上げますと、論点1の2番目の○の「高校教育では」ということで、私は社会の一員として「社会の発展に寄与する態度」の「態度」というのが非常に漠然として何のことかわからないので、先ほど山内委員からは、夢と志という言葉が出ました。それから、武田委員からは責任感という言葉があった。これは社会の発展に寄与するという志と夢と責任感というものをきちんと高校時代に育成するのだということが必要なのではないか。もう少し具体的に言わないとなかなかわかりにくいのではないかと思いました。わかりにくいというか、めり張りをつけるという意味でございます。

論点2の高校教育で何をすべきかということで、これは○の4つ目でございますが、「高校生の多様性を踏まえた特色化」は大変重要なことで、私はこれが一番大事なのではないかと思うのです。すなわち、機能分化ということであろうと思います。私は東京都の都立高校の指導要綱とかパンフレットを見て、むしろ非常によくここまで踏み込んでやっておられるなと思いました。

すなわち、普通科では進学指導重点校、A、B、Cぐらいのランクに分かれて、なおかつエンカレッジするという高校、すなわち中学校の学び直しの高等学校というのもきちんと用意してある。それから、専門学校、工業高校、農業高校等の専門学校がもちろん用意してあって、これからさらに深く勉強しようとしたら、そういうところからも大学にさらに行けるようにする。

このように、機能分化がきちんとはつきり分かれて、それを高校生が選べるようになっている、これは非常に大事なことではないか。こういうことを言うと、すぐ差別ではないかと言われる人がいる。これは大体先生方の手がすぐむ最も悪い言葉ではないかと思うのです。生徒の多様性に沿って、生徒みんなが誇りを持って高校生活を送れるようにするための教育であるという認識を周りもみんなが持つこと、本人もそういうように持つこと、誇りを持つことが大事なのではなからうかと思えます。それが機能分化につながるのでは

ないかと思えます。

以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

では、大竹委員、次に八木委員、それから佐々木委員。

○大竹委員 皆様方からお出しいただいた意見と重複する部分があることをあらかじめお断りしておきたいと思えます。1980年にレーガン大統領がベネット教育庁長官のもとで教育改革をされたのを非常に参考にしたいと思えます。

一言で申しますと、価値教育ということ。価値の創造ということを非常に強く訴えておられるわけです。今、副座長の御様子からお話が出ましたけれども、高貴な価値である確信、希望、夢、持久力、苦難に対する忍耐、こういったものを価値教育とおっしゃっておられるわけであります。もう少し詳しく申し上げますと、3つに分かれています。

認知的な領域が1つ、2つ目が情意的な領域、最後の3番目が心理運動領域となっています。これは全て全人的な開発手段であって、私は非常に参考にしたい部分ではないかと思えます。これを3つのCとしてくくっており、1番目はキャラクターのCで人格。2つ目はコンテンツのCです。これも価値教育につながるということです。3つ目が、先ほど御委員がおっしゃったチョイス、選択です。この1、2、3の3Cが、3つとも価値教育改革と呼んでいいと思うのです。将来、総理から教育再生実行会議の提案について3つか5つぐらいの項目にまとめ、発表いただきますと全国民が理解しやすく納得すると思うのです。それをいかにわかりやすくまとめていただくか。これは現在検討している高校教育、大学教育。もちろん社会人の学び直しの教育についての提言もそうだと思います。

○鎌田座長 それでは、八木委員、お願いします。

○八木委員 今、高校は7割が普通科で、私は、これは数字として高過ぎると考えます。教育再生の目的を、世界と戦って勝つ強い日本人の育成と考えるならば、全体として活力をどう生んでいくのかということが必要になってくると思えます。そのときに、やはりキーワードはこの論点にもしばしば出てまいりますけれども、多様性ということではないかと思えます。

そこで2つほどですが、1つは、6・3・3制の議論とも重なりますけれども、複線型を含む多様なコースを高校で用意すべきではないかということです。普通科7割ではないということです。

2番目としては、高校は16～18歳までですけれども、これも後ほど議論することになる到達度テストの導入とも関わりますけれども、やはりすぐれた人材を活用するという意味では、16～18歳まで高校にとどめて、その後、大学ということではなくて、大学への早期入学を可能にするような措置も国家戦略と考えれば必要ではないか。そういう意味での多様性も考えたかどうかと思えます。

○鎌田座長 どうぞ。

○佐々木委員 論点メモを見させていただいて、すごくよくまとめられているなどと思いま

す。その中で私自身が強調したいことは、特に高校教育に関しての知育、徳育、体育、これをもって全人教育と言うわけですが、実際に知育を10としたら徳育はどれぐらいなのだろうと思った時に、個人的ですが1以下なのではないだろうか。体育は2ぐらい。圧倒的に知育に偏っているように思えてなりません。

先だって視察で慶應の藤沢キャンパスにお伺いしましたが、そのときに私が一番驚いたのは、A0入試における面談を重要視する姿勢です。面接にかける時間が一番短い先生たちで30時間、一番時間が長い先生たちは、なぜこの大学を目指すのかという全受験者の志望動機に目を通すこと含め、100時間以上かけている。やはりこのことがすごく大切だと思いますし、また生徒たちも、なぜこの大学を選んだのですかという時に、すごく明確な目的や目標意識を持っていて、またそれが個人的な夢とかではなくて、本当に他の委員の方々がおっしゃるように志、要するにより社会に対しての貢献や価値につながるような意見を述べていてしっかりしているなと思いました。それはやはり高校の教育において、学校教育がそういうことをしている場合もあるでしょうけれども、個人においての肉体的には大人に近づきつつありますが、まだまだ高校生は精神的には幼い部分があると思うのですが、そこをきっちりと家庭で育てているのだろうなと思えてなりません。

私が塾を経営している関係で、いろいろな事例を見てみると、一番落ちこぼれたり、高校中退が多いのが高1の1学期終了時です。義務教育を終えて、多くの子どもたちが高校受験をして入るのですが、その入試はほとんど知識的な詰め込み教育の域を出ていないと思えるのです。なぜ学ぶのか、自分は何がしたいから何を学ぶのか、というような部分について、高校入試から知識、偏差値的なものを脱却してでも、取り組んでやるべきではないだろうかと思うのです。時間数的にもインプットの時間や教育が多くて、育んだり、アウトプットしていく時間が少ないですし、もちろん正解のある世界も高校教育までであるでしょうけれども、特にそれ以降は正解のない世界で、私たちは多くのものを探究していく中で学んでいくわけですから、そういう部分においても高校教育が持つ意味合いや重要性はすごく大きなものがあると思います。

資料を事前に提出させていただきましたが、「ナガセ」という会社がございまして、衛星授業での大学受験予備校を全国で1,000教室近く、生徒も10万人いて、東大現役合格者の3人に1人を輩出していて、スイミングスクールや中学受験塾も展開している民間の教育会社ですが、その代表者に今回の議論のテーマについてお話をお聞きしました。資料はそのことをまとめています。いわゆる受験産業なので偏差値の権化、偏差値至上主義のように思われるかもわからないけれども、もうそれはやめましょうよと、民間教育からしても、受験産業としても、やはり志を高めていくような教育が大事だと思いますということを資料の終わりのところにまとめていただいていることをご紹介させていただいて、お話を終わらせていただきます。

以上です。

○鎌田座長 では、河野委員、お願いします。

○河野委員 高校教育、大学教育においては、一般的な教養や専門的な知識等を習得させることが求められていると思うのですが、論点メモにもあるように、これらの教養や知識は、義務教育の基礎の上に成っているということが重要だと思います。先ほどからの意見に出ている規範意識であるとか、夢を持たせそれを実現する力をつける、志を育む、責任感を持たせる、そういったものは、高校から始めるというのではなく、当然、義務教育の段階からしっかりと身に付けさせていくことが大事であると思います。

もう一点、これからの日本においては、国際化に対応できる多様な人材の育成を図ることが必要であろうと思います。そのためには、高校、大学、大学院において、それぞれの学校が育成しようとする人材像を明確にするということ、そして、それぞれの学校が、そうした人材を育成するための特色ある教育を推進して、育成した生徒や学生を、責任を持って社会に送り出す機能を強化する必要があるのではないかと。確かに一般的な教養を高校において広く身に付けさせることも大事ですけども、専門性というものを身に付けさせるために、それぞれの学校の特色を生かして、たくさんの学びの選択を生徒に用意することも、多様な生徒に応じる学びという点においても大事ではないかと思えます。

○鎌田座長 ありがとうございます。

ここで総理が次の公務に移られる時間が近づいてまいりましたので、その前に、総理から一言いただければと思います。これまでの議論をお聞きになった御感想などございましたら、ぜひお願いいたします。

○安倍総理 高大接続や大学入試の在り方、高校のいわば存在意義そのものについて議論して変えていくというのは、大変野心的な試みであります。同時に、今の子供たちは今のシステムの中で勉強していて、それぞれ自分のコースを選択しているという状況があります。ですから、先ほど下村大臣ともお話をしたわけですが、まずは我々の議論が高校生あるいは中学生や御両親を不安にさせないということも大変重要なのだろうと思えます。そのことも踏まえながら、どのように変えていくかということをよく議論していく必要もあるのだろうなと思うわけがあります。同時に、まさに今、御議論を伺っていて、白地からつくっていくという皆様の意欲を感じさせていただいて、大変頼もしく思いました。

それぞれの論点、非常に難しい課題等を含んでいるわけですが、基本的には、先ほど来、皆様からお話があるように、生徒の多様性ということを重視していきたいと思えます。多様性というのは複線化していくということにもつながっていくわけでありまして、多様性そのものの捉え方にもさまざまあるのだろうと思えますので、ぜひ広く捉えていただきまして、多様性ということ 키워ドとしていただきたいと思います。

その中での高校の役割は、鈴木委員からも御指摘がありましたが、高校は大学に行く過程の準備期間である3年間という捉え方になっていて、結局、その後、大学に行かないというのは一つの単線の中ではドロップアウトという思いにとらわれていくことになる。場合によっては一生そういう思いにとらわれることになるのかもしれない。しかし、そう

ではなくて、生徒の多様性に対応した高校の役割と、そして高校そのものの価値を高めていくことも大切なのだらうと思います。そもそも高校が3年間でいいのかどうかという御議論もいただかなければいけないわけでありまして、最初の論点1がまさに基礎的な論点なのだらうと思います。よく御議論いただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

どういふ結論、報告になるにせよ、現状を変えていくということでありまして。時間軸はまた御議論いただきますが、相当さまざま議論を呼び起こすことにつながるわけでありまして、しかし、まさに教育再生実行会議が教育を変えていく大きな場であり、ここから物事が変わっていくということですので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○鎌田座長 どうもありがとうございます。

総理はここで退室されます。お忙しい中、まことにありがとうございます。

(安倍内閣総理大臣、退室)

○鎌田座長 引き続きまして、高校教育の在り方についての御意見をお伺ひしてまいりたいと思ひますが、富田議員、どうぞ。

○富田衆議院議員 先生方のお話を聞いていて、本当にそのとおりでなと思ひますが、私は高校3年間、下宿してしまひて、親元を15歳で離れました。そのおかげで中学時代は好き嫌いの激しい子供だったのですが、何でも食べないと生きていけませんから何でも食べられるようになりまして、自分で洗濯から何からして、今でもアイロンがけは家内ではなくて私が全部。そういう人生を生きていく中での基礎的なものをつくれた高校時代、今はなかなかそういうのは難しいのだと思ひますけれども、四畳半に2人で下宿してしまひたので、テレビもありませんし、何をするかといつたら、サッカー部に入つてしまひたから、ずっとサッカーをやり、空いている時間はずっと本を読んでいるという、そういう意味では、自分で自分の将来を3年間でよく考えられた。今の高校生はもう忙し過ぎて、そういうことができないのだらうな。そういう中で、自分は将来何になるのかを考えられるような教育体制が大事なのではないかと自分の経験でも思ひます。

山内先生から、夢と志、本当にそのとおりでなと思ひますが、その前提として、規範意識を養うという御提言がありました。いじめ対策法案に親の義務、家庭の義務として、規範意識を養うように子供を育てると自公で書きましたら、家庭教育への介入だと民主党初め物すごい反対が起きまして、幾らなんでもそれはないだらうと、人の物をとつてはだめだし、人を殺してはだめだと、当たり前な話をきちんと子供たちに教えるのは親の役目だということですのでそこは押し切つたのですけれども、そこに反対意見が出てくるというのは社会がゆがんできているのではないか。小さいときに規範意識をきちんとわきまえるようにならないと、大きくなつてもなかなかいろんなことができないのではないかと思ひますので、本当に山内先生の指摘は物すごく大事だなと思ひました。

以上です。

○鎌田座長 高校教育に関連して、ほかにつけ加える御意見はございますか。

どうぞ。

○佐々木委員 鈴木委員のほうからひきこもりの例がございましたが、私は60名のひきこもりの若者を3年間ほどサポートしてきました。高校生なのですけれども、ひきこもる前に高校中退をしていますし、既にもう中学から不登校が始まっています。その背景をカウンセリングや教育コーチングで引き出してみると、60人のうち、大体3割の子どもたちは、親から幼児のときに虐待を受けていましたし、約3割の子どもが軽度の発達障害ということで、自尊感情も低い状況にあって、いじめにも遭っていました。あと3割の子どもが、男の子に多かったのですが、中学に入ると色々な小学校から生徒が集まってくるのですが、そのときの言動で、関西で言うところの「いちびっている」と言うのですけれども、あいつ、いちびっているよねと言われて、呼び出されて、ぐっと鼻柱を折られるみたいな、そこから人が怖くてというような根深い部分があるというのが実感です。そうすると、今、富田先生がおっしゃられましたけれども、家庭教育に介入していかなければ、親が子どもを虐待することから連鎖して、不登校、中退、ひきこもりとなって、それが何十万人になっているということです。多様化の教育というのがありましたが、そういった子どもたちに対してきっちりと教育していくことが大切なのではないかと思えます。そこが高校教育においても重要だと体験上感じています。

以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

川合委員、どうぞ。

○川合委員 先ほど来 의견にありました規範意識、夢、志、全て全くそのとおりだと思います。私、1点、自ら考えて行動する、課題を自ら抽出すると申し上げたのは、集団行動の中で右ならえの規範を認めるとか、志を持つとかというのは日本的でありまして、湘南藤沢に行ったときに、佐々木委員からも先ほど御紹介がありましたけれども、非常に自発的な発言をされる学生さんがいっぱいいらっしゃいました。その大半が実は外国での教育経験をかなりの年数受けていた方で、多分、日本の教育ではああいう人はなかなか育たないのではないかという思いで実は拝見しておりました。集団の中で99人に対して1人になったときにも、自らの意見を恐れずに言えるような環境の中で教育はなされなければいけないのではないかという強い思いがございます。だから、学校の指導のもとでボランティアすることはもちろんいいことではあります。学校から解放されたところでも、やはり個の意識でもってきちっと活動できる人間を育てるとというのが次の教育改革にはぜひあってほしいと思います。

夏休みを長く確保しインターンシップをする、違う環境に飛び込む、そういう経験がすごく大事なのではないかと思うので、何か学校教育と違った社会教育の場を創出する試みを、地方自治体にもご協力いただき、ぜひつくっていただければと思っております。

○鎌田座長 どうぞ。

○大竹委員 時間の関係で省略して発言させていただいたのですが、なぜ「価値」「価値」

と申し上げているかという理由をつけ加えさせていただきたいのです。私は50年間アメリカの企業、しかも金融機関にいますので、金融資本主義が今の資本主義のような感じになってしまっていることに対して私個人としては非常に懐疑的なのです。

では、どういう資本主義をこれから選択すればいいかという、社会的価値創造型資本主義であると言いたいのです。したがって、そういった社会的背景というバックグラウンド、ベースをしっかりとやるのが高校教育においても大学教育においてもすごく大事なのではないかと思います。努力という言葉は実はありふれた言葉で案外軽視しているのですけれども、天才とか英才というのは決してすぐれた知能、IQが高かった人ではなくて、努力の積み重ねの結果、大秀才や英才が誕生していると思えてならないのです。そのことをシカゴ大学の教授が追跡調査された結果も実は報告書として出ております。ですからもう少し自信を持って、努力せよということをしきりに家庭内でも学校でも言い続けていただきたいと思います、君はもうだめなのだということになってしまうと本当にだめ人間になってしまうと思うのです。だめ人間などはないのだということ逆を逆に学校の先生などは中心に置いて教育していただくことをお願いしたいのです。これは本当にお願いなのです。

○鎌田座長 ありがとうございます。

それぞれに大変有益な御意見を頂戴しましたが、時間の関係もございますので、続いて大学教育の在り方についての御意見をお伺いしたいと思います。御自由に御発言ください。

八木委員、どうぞ。

○八木委員 日本の大学というのは、明治以来、つい何十年か前までは大学の進学率は非常に低くて、一部の人しか行けなかったわけですが、今日、51%が大学に進学している。その大学のシステムがどうなのかというと、明治のときからほぼ変わっていない。すなわち、専門家を養成するための専門の学部が用意されている、それだけなのです。ただ、今後、我が国の大学においてどういう人材を育成するのか、あるいは社会としてどういう人材の育成を求めているのかということを考えると、一部の専門的な知識に特化した人たちではなくて、幅広い国際的な教養を持ち、かつ語学力を含むコミュニケーション力があり、さらに日本人としてのアイデンティティをしっかりと持っている、そういう人材だと思うのです。そのように考えますと、現在の我が国の大学教育が余りにも専門教育に特化しているということに問題があるのではないかと考えます。

もちろん、世界的な研究を行う専門的な研究機関あるいはそういう性格の大学もありますし、また、資格を取るだとか、そういう専門人の育成を行う大学も必要です。しかし、大半の大学はむしろ教養学部といいますか、そういったものにしていくほうが、あるいはそういった方向に導いていくほうが社会のニーズには合っていると思います。

もう一つは、そういった中で、大学の教員はどういう認識でいるのかというと、大学はあくまでも研究機関だと思っているわけです。高等教育機関ではあるのですけれども、教員の認識としては研究機関なのです。その教員の研究にいわば学生はつき合わされている。

今後は、大学は文字どおりの高等教育機関に変わっていくべきだと思いますし、各教員の認識も大きく転換していかなければならないと考えております。

○鎌田座長 では、川合委員、どうぞ。

○川合委員 今の八木委員の御意見は、私は一部大変賛同するところであります。ただし、4年制の大学全てがそれでいいかという点が多分そうではなくて、前半の時期では、早期のところはやはり本当の意味での高等教育機関として、きちっと幅広い、しかも少し高度に専門化したところも含めた教育をすべきだと思います。

しかし、その上に今の大学院につながるような高度な専門的な教育を行う機関も必須でございまして、現行6・3・3・4となっており、その上に大学院が2だか5だかふわふわとした感じではあるのですけれども、その辺の切れ目をどこに入れるかというのは今後大きな論点になるのではないかと考えております。大学の専門分野の教育でも、18歳で入学した直後から極度に専門化した教育をしていることの弊害が出ておりますので、これは一度深く議論すべきポイントだと思います。

一方で、大学教育に関しては、高度な高等教育機関としての位置づけと、高校とのつながりというのは切り離して考えられないと思いますので、ここはこの議論の中でぜひ整理していけたらいいと考えております。

○鎌田座長 ありがとうございます。

山内委員、どうぞ。

○山内委員 今の2人の御意見は、それぞれ非常に正しいところが強調されて、必ずしも矛盾するものではないと思うのです。先ほど総理も言われた、いわゆる教育やシステムにおける多様化、多様性、複線化、こういうことにかかわる問題だと思うのです。全ての大学が例えばの話、東京大学のような大学を目指すということはないにもかかわらず、実質的な偏差値その他の理由から、そういう小型東大化というようなことになってきた現状、こういうことについての懐疑心が今、八木委員から寄せられたとおりでございまして、まことにそれはそのとおりであると思います。

大学院教育の重視というのは、他方、優秀な若者を育ててくる点でいずれかが担わなければいけないのですが、ここでもあるべき大学教育を実現するために何をなすべきかという点で大学院教育の重視というのは、大方、第三次答申でも強調されましたように、今回もまた指摘されることになるのだと思います。

ただし、その場合に、現に学んでいる若者あるいは父兄の不安を高校教育の改革等によって与えないということを先ほど安倍総理がおっしゃられたように、大学院教育の重視ということを行う場合においても、現実におきましてポストグラデュエート、ポスドクの就職問題、そして、高等教育の担い手や研究の担い手が、就職状況がなくて非常に不安定な状況に置かれているという現実があります。こういうことをどう解決していくか、あるいは解決の展望も示しつつ、そして、国として、あるいは教育再生の場において、そういう問題もきちっと考えるのだと、この種の展望も踏まえながら指摘する中で、大学院教育を

重視していくことを触れていく必要があるかと思えます。

先ほどの川合さんのお話にちょっと戻りますけれども、学校教育と違う教育の場の創出ということをおっしゃられても、かなり高いレベルの話題であり、東京など大都市部の話をしているのではないかと思われます。私たちがここで問題にすべきは、要するに高校生において格別集団主義とか集団意識の強調ではありません。規範意識、つまり社会的なルールや人間として守るべきいろいろなけじめのようなもの、そうしたことについてますます欠けてきていることが問題なのです。これをどこで基本的に教えるかという、地方の公立学校教育と良質な家庭のしつけということであります。

その際に、先ほど知と徳と体育に関する教育の割合が非常に徳において低いということをおっしゃられたわけで、その点からいたしまして、高校の教育におきまして規範意識というものは大事だと。それを無くして夢を語るのもむなししいし、ましてや夢を志に高めていくことも難しい。そもそも学校教育と違う場所でそういう教育の場を設けると言っても、具体的にその場所が高校以外のところでどうようになるかというのは地方の公立普通教育を受けている生徒と家庭の場合はなかなか難しい。そもそも解決すべき課題が分かるというような子供たちというのは進学校や私立一貫校のような高いレベルでありまして、余りいじめとか落ちこぼれとかで問題がない子供たちが多いのではないか。だからこそ、のびのびと大学において進学して、そのような積極的なことを語れるということにもなっているのだらうと思う。したがって、こうした特権的な子供たちでなく、やはりもう少し普通の公立高校と地方の現状というところに基盤を据えた堅実な議論をしていくほうがよろしいかと思えます。

○鎌田座長 佃副座長、どうぞ。

○佃副座長 私も今までの議論に全く賛成で、ここにある論点3の最初に書いてあります大学の多様性を踏まえた機能強化、全くそのとおりだと思うのですが、ただ、これは大学としての組織の多様性という書き方をすると、一部には大学というのはもともと多様な価値を追求しておるのであるから、競争原理というのはそもそも大学とか教育というものには働かないのだという議論が横行する。これを非常に心配します。多様性があるのは、それぞれ多様な人にどう対応して教育していくかというのが大事なのですが、大学が多様であるから評価というものはふさわしくないというのが先生方と議論していると感じることがありますので、こういう表現は気をつけて、むしろ多様な人材をどう教育していくかで、どう強みを伸ばしていくかということで、そういう意味だらうと思えます。

したがって、研究成果あるいは教育成果の大学の内外でのコンペディション、評価、それに伴う予算配分とか人事異動、これをまじめにやって、特色のある多様性のある強みというのをそれぞれの大学が組織として出していくということが大事なのであって、評価というものは当然受け入れるべきではなかろうかと考えます。皆さん、そういうように思っておられるのだらうと思うのですが、ともすれば誤解される方があるので、このあたりの表現の仕方というのは気をつけられたほうがいいのではないかと感じます。

以上です。

○鎌田座長 大竹委員、どうぞ。

○大竹委員 私は学生という立場も大いに考えて議論していただきたいという気がいたしますのは、大学は学生のためにあるからです。学生が武芸を学ぶときに練習試合とか稽古、他流試合などをするわけですが、それぐらい学生と教授が真剣に向き合って活発な議論を高めていただくような教育現場、そういう大学の文化をつくっていただくことが大学を変えていく1つのきっかけになりはしないかというような感じがいたします。

なぜそんな話をしたかといいますと、またアメリカの話になって恐縮ですが、米国などで教授などが授業をやっている、生徒がすぐ質問というような感じで立ち上がってきます。それを制止することはしないわけです。傾聴力というか、聞く力を教授も備えています、間違った意見であっても決して罵倒しないのです。そういう考え方を逆に褒めてやるということもあるわけです。日本の今の学校教育の現場を視察しましても、今の授業の在り方をもう少し創意工夫されれば楽しい授業が展開できるのではないかと感じたものですから、これもまたお願いなのですが、ぜひよろしくお願いします。

○鎌田座長 それでは、佐々木委員、鈴木委員でよろしいでしょうか。

○佐々木委員 ちょうど今年の夏前から2カ月ほど、私の家にアメリカからの留学生をホームステイで受け入れていました。長男がアメリカに留学しておりましたので、英語力を高める、キープするという目的もありました。ところが、そのアメリカ人の彼が日本語がベラベラにしゃべることができる。韓国語もしゃべることができる。中国語もいけるということで、結局英語を使う機会がほとんどなかったのですが、彼は1日に私の家にながら8時間勉強していました。

アメリカの大学はどのようなのですかと聞くと、彼はドクターコースで学んでいるのですけれども、リベラルアーツ、教養分野については、我々が教える。夏の期間は授業がないので、無給になるので、他でアルバイトするか、研究費をもらう形でやる以外にないので、日本に来ましたということだったのです。

では、高校のときはどうでしたかと聞いてみたのですが、これはいい悪い別ですが、ある意味日本の強みでもあると思うのですけれども、彼は、家に教科書を持って帰って宿題をやることはただの1回もなかった、そんなことも指導も受けていないということを言っていました。要するに、非常に学ぶということに関しては乾いた状態で大学に入って、教養で学んで、猛烈に勉強して、またもっと学びたいから大学院に行っている。でも、日本の場合、私は塾をやっているから言えるかも知れませんが、もう大学受験で伸び切ってしまう子が大半だと思うのです。そこからもう一度学べと、一般教養だと言われても、そんなものは高校でも学んだしなみたいな、何回やるのかみたいな感情を持つと思うのです。さらにその上に、大学の先生の教え方もあまり上手ではないというような状況が重なったりしたら、やる気が起きない、授業も行かないみたいな悪循環にどうしてもなってしまうと思うのです。だから、色々な大学の価値観はあるにしろ、一人一人の大学生についてマ

スプロ的ではなくて、もっと一人一人を手当て、面倒を見ていく形で教育、指導、育成を行っていくべきだと思います。

もう今は辞められましたが、ある有名な大学の理事長の方からお聞きした話ですが、ある教授をつかまえて、「あなたは教育者か研究者か」と聞いて、「研究者です」と答えたら、「じゃあ論文見せろ」と提出させ、読んだ上で一定のレベルでない論文だった場合「この程度だったらもう大学を辞めてくれ。あなたの給料は学生の親御さんに支払っていただいている授業料で成り立っている。教育者になるのだったら残ってもよい、どうするのか」と問うと、「私は教育者を選びます」と答えて大学に残ったと、そんなやりとりをしたことがあったと言われていましたが、やはり大学のガバナンスがきっちり強化される中で、その大学のカラーを前面に出していかないと、少子化の世の中で、生き残っていくことはできません。きっちりとガバナンス強化するところから大学の生きる道を見つけてやっていかなければだめだと思います。

以上です。

○鎌田座長 どうぞ。

○鈴木委員 今、佐々木委員からガバナンスの問題が出たのですけれども、ずっと視察していきまして、ガバナンス問題については大学側のかかわる一番大きなあれだなという形で受けとめていました。特に東京工業大学に行ったときも、なかなか理想とするところはいいのけれども、ガバナンスの問題で壁に突き当たるとか、東大の秋入学もいろんな理由があってどこかで腰砕けになっています。あれだけ騒がせておいてです…、その後ろにいる高校生たち、受験生たちの大きな動揺を誘っている、ええっというような感じで現場も受けとめるし、家庭も受けとめているわけです。まずは、大学の先生方に目を覚ましていただきたいというのが大きな私の願いなのです。

というのは、私自身もある大学の附属高校に関わっていて、さまざまな形で高大接続に取り組みました。高大接続というのは大学入試の変更という問題ではなくて、ミスマッチの防止とか、そもそも大学とは一体何だろう、そこで何を学習するのか、といったことを知る上でも、附属生徒達が在学中から直接授業を受けてみるのがいいことだと考えたのです。一部の授業がだめならば二部の授業を開放してくださいとお願いしたのです。そうしたら、理事長・学長さんサイドは理解してくれているのですが、意外にも大学の先生方、教授会の対応、つまり学部対応が反対の姿勢なのです。高校の授業を大学に下請けさせるのかという意見もありました。はじめはそれぐらいの認識で時間がかかりました。

ところが、実際に授業を受けてみたら、生徒は例外なく非常に熱心に受けており、終わって最後に修了式をやって、生徒が感想を述べ、大学入学後に認定される受講科目の単位も頂きました。副学長さんは生徒の姿に非常に感動して、この子たち、全部自分のゼミの生徒に欲しいと仰ってくれました。学部の学生よりも必死になって学びを求めてくる高校生のほうが学ぶ意欲が強いのです。

この子たちは、大学入学後も非常に成長して、大学側も附属高校生を見直しています。

もちろん例外もあるのですが、高大一貫システムを有効に活用していくことが大学自体の意識改革にもなるのだなということを改めて認識しました。大学の学長や学部長さんは本当に大変らしく、肝心なところで交代されることも多いですね。交代されると、学部長さんなどは、実に晴れ晴れとした顔をして交代していきます。ようやく学部長職から解放された、うれしいと顔に書いてあります。そのことについては個人的に八木先生からお聞きしたわけですが、やはり大学自体がガバナンスをしっかりと確立して学校経営が学長の方針のもとで継続的にやっていただかない限り、高校もちゃんとした計画ができない。

あと、高等学校についていろいろ希望があるのは理解できますけれども、私は肩をすくめるしかないのですが、実はどうやれと言うのと思っています。変化や多様化といった状況の下で、この教員で、この定数でどうやるのかという危機感を抱いています。ぜひ再生実行会議としても教員定員数の問題であるとか、そういったところの打開に向けた取り組みをしてほしい。その結果、教員は逃げ場がないのだと、教員である限りはそこでしっかりやりなさいということを伝えていくのが大切かなと思っています。

○鎌田座長 どうぞ。

○山内委員 佐々木、鈴木両委員の御指摘はまことにそのとおりでございますと、少し私としてはつらいものがあるのですが、そのとおり、事実です。しかしながら、なぜそうなのかという問題と、実際に具体的にどう変えるのかという問題を私はこの間まで現場にいた人間として御参考までに少し申し上げ、かつ変える道筋ですが、今の制度では、東京大学を初めとして大学が積極的にみずからを変える力や機能を持ち合わせていないのです。簡単に申しますと、教授会の自治能力というのは非常に高い。特に学部の規模が多くなればなるほど、自治能力は非常に高いですから、さまざまな予算配分や人事権など、いろんなところにそれが出てきます。ですから、既得権益や自分の属する共同体の利益を自分で潰すという発想は大学に限らずどの集団もないのです。大学人などは、最も既得権益にかかっている最後の集団だという認識が弱い。

大学の一番困った点は、構成員たちが知とか知性、そういうことをなりわいにしている職業だから、既得権益の見直しや再配分に反対する論理構成能力と反撃する能力がある。ですから、基本的に言えば、既得権益と従来の慣習の維持に尽きるのだけれども、そこをそう見せないような非常に巧みな技と経験というのを持っているということがある。これをどう変えるのかというのは、決意を持ってとか、それを自覚してとおっしゃるけれども、その決意や自覚が実際に動くというのは、何を持って動かせるのかということなのですね。

○佐々木委員 率直な御意見、ありがとうございます。私は2つあると思うのです。

一つは、私の事例でいくと、先ほど言ったように、強烈なトップのリーダーシップで、この件は、あの件はどうなのかと言って詰めていくだけのリーダーシップを持つかということ。もちろん、それはたぐいまれな例だと思いますので、もう一つは、通常の場合は法改正を含めて、教授会がトップのリーダーシップを邪魔しない、そういう権限や権力を行使できないようにすること。

改革をしている途中で、現学長や現理事長といった今のトップから次のトップへバトンを渡すことが本当に難しく、つらいということをお話で聞いたことがあります。きっちりとした法整備の中で、トップがリーダーシップを発揮することができる環境作りが、ベストな大学ガバナンスの在り方だと思います。

○鈴木委員 大学改革はできると思うのです。改革への作戦もありますけれども、やはりそれに対する支援体制をしっかりとっておくことが必要です。高校と大学はもちろん違うと思いますが、予算的な裏づけとか、民間の支援などです。

○鎌田座長 どうぞ。

○山内委員 1つだけ最後に。2人のお考えは全くそのとおりで、私も考えるのはその2つだと思います。

1つは、リーダーシップとおっしゃるのはそのとおりだけれども、リーダーシップを担う学長そのものを選ぶのは、教授会構成員たちが学長を選ぶというシステムになっているということなのです。これはトートロジーみたいになってしまう。

2つ目は、基本的に言うと、最終的には法の問題にならざるを得ないのだろうと。恐らく国鉄の分割民営化、電電公社の分割民営化、こういう大きな三公社五現業の再編成、こういういろんな既得権益層などが社会発展に関してひずみを持ったときの改革のように、政府や政治家の覚悟と世論のバックアップと大学の側に改革に呼応する良心的な力が働く、このことがなければ、今のシステム改革もなかなか難しいということになります。ですから、そうしたような覚悟を持って進めることができるかどうかというのは、大学に預けてもなかなか無理なところがあるのが現実ではないかということを上げたかったのです。

○鎌田座長 川合委員、どうぞ。

○川合委員 山内先生と同じ大学の所属なのですが、私は期間が短いのと、外にいたことが長いので、少し違った意見を持っています。

日本の大学のように教員が経営を含めて自主運営をしている大学は世界でも非常に珍しいケースであり、欧米の大学のほとんどは、大学経営者という経営専門者がいます。そういう人たちが1つの大学から次の大学と経営手腕を買われて動いたりするようなシステムが現実に動いております。

どういう形にするかは別ですが、私は、ある程度、日本の大学も、経営する人の集団と運営する集団と分業する時代が来ているのではないかと考えています。特に研究科長や専攻長になると忙しくて教育もままならないという現状は改善すべきで、運営の事務という言い方がいいのかどうかわかりませんが、アドミニストレーションを行うプロフェッショナル集団が当然必要であると思います。実際に我々の専攻などでも最近外国から教員をリクルートしてきたりするわけですが、口をそろえて言うのは、なぜこんないろんな書類書きが忙しいのだということです。このような状況では時間がなく、秘書など必要ないと思っていたけれどもいなければ仕事はできないと言って、文化の違いを憂えられることがございます。日本的なよさももちろんあるのですが、仕事を適

切に分担することでスムーズに経営するためには、教員は研究や教育のプロであり、決して大学経営のプロであるとは思わないので、その意識改革をすることが大事だと思います。

そのための1つ大事なきっかけは、やはり大学経営者に大学を経営、運営するための予算措置が適切になされることであって、これは前回の答申のところでも書いていただきましたけれども、外部資金の間接経費とか大学の運営費そのものがちゃんと大学経営のために確保されるシステムを整えることがとても重要なことではないかと考えています。大学の先生たちの意識を変えるというのはそんな簡単ではないと思うのですけれども、実際に外国経験のある先生たちなどはその状況を知っているわけですので、決して不可能ではないと思っています。

○山内委員 それはすごく甘いのです。そういう問題では全くない。先ほどから議論しているのは、そういう理屈は今までもわかっていることなのです。しかし、当たり前といえば当たり前ですが、既得権を自分から手放す大学人はいないのです。それを中から変えていくプロセスと手法にどうやってレバレッジを効かせるかということについて具体的に考え行動する人が大学には少ないのです。欧米など外国の経験がある人間だから改革ができるとか、そんなレベルのことではないのです。

問題は、良質な問題意識があっても、それを現実に変えていけないのが総長であり、総長にはそういう権限もない。そこをどう変えるかということについての道筋をきちっと出さないと予算だけをもらえばよいという今の大学人の平均的考えと同じになってしまう。運営や使用は結局、大学人任せでよいということになる。それは誰でも経験を持っているからわかっているとか、外国に関して知っていればそれは理解できるとか、経営権の問題と行政権、教育権、研究権がいまや分かれているから、改革に期待がもてるというものではありません。最後には教授会の権限の見直しや終身任期の教員の既得権益の問題がかかってくるという、それをどう突破するかということをも具体的に議論しないと、我々の議論はむなしなものになります。

○鎌田座長 そろそろ時間が近づいてきました。それぞれ短くお願いします。

○大竹委員 私は今の先生の御意見にすごく賛同しておりますので、一言だけ申し上げたいと思います。総理大臣は今いらっしゃらないのですが、下村大臣と総理大臣が既得権益という強力な岩盤にドリルを当てて破壊、突破していただく以外ないというのが私の個人的な見解です。

○鈴木委員 スタンフォード大学の例など視察の中で学んできました。大学が今抱えている問題を解決するためにはときに、日本の大学の場合は、山内先生もおっしゃっていましたが、やはり法的な面から変えてしまうというしかないのかなと思いつつ、自助努力に頼らないで外圧でやってしまうということも一策かなと思っているのです。

今後、高校教育をどうするのだとか、小中学校の教育をどうするのだといったときに、これは公教育の枠にあるわけですから、やはり政府であるとか文科省がある程度強力なてこ入れをする形で、経営者とか経営陣を孤立させなければ十分に学校は改革出来る可能性

がある、こういうことを言いたいのです。山内先生にはぜひ頑張っていたいただきたいと思えます。

○山内委員 山内はもう東大をやめたのです（笑）。予算権、人事権などの既得権益を手放さない点では大学人も他の職種と同じであり（笑）、大学の内部で自立的に改革することは非常に難しいということを経験知として申し上げたかったわけです。

○鈴木委員 大学で、私学ですけれども、理事もみんな改革に賛成、事務当局もやりましようということを言っているのですけれども、教授会だけが動かない。これは一体何なのだというのを自分も考えながらきたのです。そういう気持ちからひとこと申しました。

○鎌田座長 大学もそれぞれの事情を抱えておりまして、国公立と私立でも違いますし、それぞれの大学の成り立ちと運営の仕方によってさまざまです。教育的な配慮についても、大学全体として10年前、20年前の授業と今の授業は全く違う。非常にきめ細かな、学生の立場を考慮した授業に東京大学も含めて変わってきていると思います。

ガバナンスの点につきましては、御指摘のような点があるのですけれども、それぞれに一定の目標を掲げて改革を進めていっています。大学が自己改革を進めなければいけないという意識が大学の中に共有されていかないと、制度だけつくってもなかなか変わらないという側面もあるのですが、大学の国際的な競争が非常に激しくなっている中で教員全体の危機感が高まってきている。そういう教員全体が今の日本の大学を変えないと、日本の大学だけではなくて、日本の国自体が危うくなるのだという意識を共有していくことが基盤として必要なのですけれども、そういう環境が、ある種の外圧、国際的な大学間競争の激化も外圧なのだと思うのですけれども、それによって以前と比べて急速に整えられつつある。それをより加速するような政策的な方策を講じていくことが必要なのではないかという気がします。

雑な感想を座長の特権で申し上げましたけれども、ほかに御発言がないようでしたら、そろそろお時間でございますので、下村大臣にまとめのお話を伺いたしたいと思います。

○下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣 今日はありがとうございました。白熱した議論がなされまして、今日は高大接続・大学入試の在り方の前提として、高校教育の在り方、大学教育の在り方ですが、大学教育については大学のガバナンス、大学そのものの運営の仕方というような議論が実際、中心だったのではないかと思います。

高校教育については、多くの方々から、夢、志という話がございました。私、きのう、安倍総理、鎌田座長のふるさとである山口県で全国高等学校PTA連合会の全国大会がございまして、約1万人が集まりまして行ってまいりましたが、その幹部といいますか、スタッフの方々のTシャツには「志」とありまして、まさにPTAの方々も夢を夢で終わらせない、志を高めている。キーワードは志だということをPTAの方々も本当にここで議論されていたのと同じような危機感、思いを持っておりました。今年で63回目であるそうですが、私が75分間、日本の教育再生ということで7会場同時中継で、一番メインの会場は3,000人ぐらいでしたが、教育再生実行会議で議論され、決めていただいたようなことを中心にプレゼン

をいたしました。恐らく文科大臣がプレゼンしたのはその全国大会で初めてではないかと思いますが、皆さん、それだけ長く国がどんな教育再生をしようとしているのかということをしちっと聞いたことがなかったということで非常に関心を持っておられて、できたら2年後ぐらいにどの程度達成したかどうか、検証をもう一度聞きたいという話もあったぐらい、非常に教育改革に対してPTAの皆さんも大変な関心を持っておられました。

昨年11月にOECDが世界の長期経済成長見通しを発表した際のコメントとして、私たちの子孫が暮らす将来の世界は、これまでとは全く異なったものとなるだろうと。教育と生産性は今後の経済成長に向けた牽引力となるため、世界全体でこの分野の政策が優先されるべきというのをOECDは発表しています。それだけ、教育というのはただ未来に対する先行投資ということだけではなく、各国が生き残っていくための最重要テーマ。当然、安倍内閣においては、もちろん別にOECDに指摘されているまでもなく経済再生と教育再生は、経済再生の中の特に3本目の矢の科学技術イノベーション、それに沿った人材育成を支えるためにどうしていくかということも含めて、大変重要なテーマになってきていると思います。今日も議論されましたが、その中で高校教育と大学教育の在り方を踏まえつつ、大学入学試験がどうあるべきかということ考えた場合、求められる能力は今までのような単に学力一辺倒の1回勝負のテストでは測れない。もっと本質的な意味でのこれからの時代に問われる教育力というのは何なのか、子供たちに対して、学生に対して何をなすべきかということが高校教育機関、大学教育機関の中でも問われるのではないかと思います。

数日前まで私はロシアに行っておりまして、メインは世界陸上で、9月7日に東京オリンピック、パラリンピック招致に向けての活動を中心に、世界陸上で各国のIOCのメンバーとお会いしてきたのですが、その間を縫ってロシアのいろんな科学技術関係や宇宙開発等の関係の要人とお会いした中で、ロシアの大統領補佐官、これは教育・科学技術担当補佐官で、その補佐官になる前は8年間、ロシアの教育・科学担当大臣をされていた方なのです。この方が最初に私に対して問題提起をされたのは非常に哲学的な話で、つまり、教育によって幸せ、幸福感はどうつくるか。一人一人の学生に幸福感を持ってもらうための教育をどうすべきか、どうあるべきかということについて考えあぐねているし、日本はそれをどうしようとしていますかという話があったのです。

これは調査機関が世界幸福度調査というのをしています、その中で、1つの統計では多分200カ国近い国の統計の中、日本は90位、中位ぐらいです。世界第3位の経済大国で豊かな国と言われているにもかかわらず、幸福度というのは世界で真ん中ぐらいで高くない。経済力からしたら10番目以内に入ってもおかしくないような状況ですけれども、ちなみにアメリカが23番目ぐらい。ロシアは実は167位なのです。そういう順位を言わないで、ロシアは多分日本よりもっと低かった記憶がありますと言ったら、補佐官もそうだと思うと言っておりました。

ですから、OECD諸国がこれから目指すべき教育というのは今までの延長線上ではなくて、ひとつのキーワードとして多様化という話もありましたが、伸びる子はもっと徹底して伸

ばす。一方で、発達障害等の子供のお話もありましたが、それぞれの興味関心に向けて、本人の持っている潜在能力をどううまく引き出していくか。志というのは当然人によって違うわけで、他者との優劣関係の中で志があるわけではありませんから、結果的にそれがその人の生きがいになってくるかと思えます。教育をツールとして、それをどうサポートしたらよいかという中で、大学入学試験をどうすべきかは非常に本質的、根本的な話で、この議論をしていくということは当然に高校教育なり大学教育をどう変えるかということになってくるかと思えます。

今日は大学運営についてのお話がありましたが、強力な岩盤にドリルで穴をあけること。既に第三次提言でも提言されているわけですから、これからいかにそれを実行に移すかということで、教授会の見直しについても中教審で審議しておりますし、その中で、そもそも大学の学長を選ぶのにそういう選挙によって選んでいいのかということなど、果たしてそれが本当に優れた大学にしていくためにいいのかどうかという議論も必要ではないかと思えますし、今後はグローバル化の中で、国際的な感覚の中で日本の大学経営をしていかなければ、そもそも日本の大学そのものが生き残っていけないという中、法改正とかも含めながら、岩盤についてはぜひ教育再生実行会議で提言されている部分も含めて着実に実行していかなければうまくいかない。

残念ながら、第一次安倍内閣の6年前の教育再生会議でも提言されていたのですが、それがことごとく実行できなかったという挫折感を我々は持っていますので、ぜひ今回の第二次安倍内閣の中で、教育再生実行会議で同様に提言されているし、またこれからも提言されると思えますから、会議も「実行」という名前がついていますので、それを受けて政府側も実行できるようにきちっとやっていきたいと思えます。

今回は、今日の御議論をいただきながら、さらに大学入学試験そのものの在り方について御議論していただくということになります。大学入試の在り方は、先ほど申し上げましたように、教育の方向性を定める根本的なテーマでございます。これで今の高校生が右往左往するということではなくて、もっと先の大学入学試験の在り方についての議論になってくるかと思えます。拙速ということではなくて、じっくり議論しながら、なおかつ国民的な関心を常に持っていただきながら、本当に目指すべき方向の理念等を明確にする中で入学試験をどうするのかということに合わせて提言していただかないとなかなか国民の理解は得られないと思えます。ぜひ引き続き御議論していただきながら、日本というよりは世界共通のテーマにもなってきておりますけれども、一人一人の可能性をもっと引き出して、そして生き生きと幸福に暮らせるような社会の中での教育の在り方ということについて御議論していただきたいと思えます。

今日はありがとうございました。よろしく申し上げます。

○鎌田座長 どうもありがとうございました。

今、大臣のお話の中にもありましたし、せんだって委員からおまとめのありました教育再生会議報告のうち、高大接続・大学入試関係に限ってでございますけれども、現在まで

の実施状況を表にまとめたものを資料3として配付させていただきましたので、御参考にしていただければと思います。

本日、大変有益な議論を賜りました。生涯をかけて主体的に学び、社会に貢献していく人材を育成するという観点から、高校教育、大学教育の在り方を御議論いただきましたので、次回は高大接続、大学入学者選抜の問題を議論することになっておりますけれども、これも恐らく単なる技術論ではなくて、今申し上げたような大きな視点から、どういう制度の在り方が望ましいかというような御議論をしていただけるものと期待いたしておりますので、よろしく申し上げます。

次回の会議は9月18日の開催を予定いたしております。委員の皆様におかれましては、本日、十分御発言し切れなかった点あるいは十分に理解されていないと思われるような点がございましたら、事務局に文書で御意見を提出していただければと思います。

それでは、本日はここで閉会とさせていただきます。皆様、どうも御熱心な御議論、ありがとうございました。